

モニターの意識化に焦点を当てたオーラルコミュニケーション授業  
豊田悦子 (国際基督教大学)

0. はじめに

生活の様々な場面で私たちは自分の置かれた状況や行動について内省することがある。それによって、今後のめざす方向や方法が確認されたり、修正されたりしている。言語を学習する際にも、観察し内省しながら、自分自身の学習状況や学習行動を確認したり修正したりしていく事は重要なことであると思われる。本稿では、言語学習における自己観察や内省、確認、修正等の行為を「モニター」と呼ぶ。まず、先行研究におけるいくつかの定義を紹介しながらモニターの果たす役割について考え、その後、自発的モニターを観察した授業、及び、モニター使用に焦点を当てた2回の授業について報告し考察する。

I. モニターの定義

I-1-A. Flavell の定義

Flavell (1979) は、認知活動または現象についての認知—メタ認知—の際の吟味、規制、調整、判断等の行為を認知モニターと呼び、認知モニターはメタ認知知識、メタ認知経験、タスク(目標)、ストラテジー(行動)の4現象のインターアクションによってなされると述べている。

Flavell によると、メタ認知知識とは過去における様々な認知現象の経験を通じて蓄積された知識であり、メタ認知経験とは様々な認知現象を意識的に認知する一連の行為の経験をさす。タスクは認知対象であり、ストラテジーはそのタスクを遂行するための行動をさす。

I-1-B. メタ認知

人間はいろいろな事柄を理解したり納得したり思い出したり学習したりする際、自分の活動またはその現象について考えることができる。メタ認知とは、こういった認知現象の認知、またはその知識のことで、情報の伝達、理解、言語習得、記憶、問題解決など、自己管理が必要な様々な場面で重要な役割を果たしていると考えられている。(Flavell 1979, Brown 1918 を参照)

I-2. Morrison and Low の定義

Morrison and Low (1983) は、言語というのは2つの機能が相互に作用することによって運用されると述べている。ひとつは創造機能 (creative

faculty) で、話者が既にもっている言語に関する規則やパターンなどを使って言語表現を造り出す機能であり、もうひとつは批判機能 (critical faculty) で、創造機能によって造り出された言語表現を、それが正常な言語使用から逸脱していないかどうか (単に体系的な知識としての文法的観念からだけでなく、より突発的な言い間違いやさらには社会言語学的に適切な表現かどうかなどの観点から) チェックする機能であるとし、この批判機能 (critical faculty) が、従来からモニター能力と呼ばれてきたものだと説明している。

### I-3. Krashen の定義

近年、モニターに限られた意味で使われることがあるが、これは Krashen が「モニター伝説」を発表してからである。Krashen (1982) は、学習者がもっている知識には習得した知識と学習した知識とがあるとし、発話は専ら習得した知識によって行い、それを学習した知識で意識的に文法訂正していると主張する。Krashen はこの文法訂正をモニターと呼んでいる。

### I-4. Rubin の学習ストラテジー

#### I-4-A. 学習ストラテジー

Rubin (1987) によるとモニターのプロセスは、認知ストラテジーとメタ認知ストラテジーの両方で起こるとしている。例えば、問題点を確認したり、解決策を見いだしたり、訂正を行ったりといった行動は、認知ストラテジーであるが、どのような行動をとるべきか決定する、またはその行動の効果を評価するといったことはメタ認知ストラテジーであるという。

#### I-4-B. 認知ストラテジーとしてのモニター

認知ストラテジーとしてのモニターとは、学習者が言語またはコミュニケーション上のエラーに気付いたり、メッセージが聞き手にどのように受けとめられ、理解されたかを観察したり、問題に対処したりする時のストラテジーのことであると説明している。

#### I-4-C. メタ認知ストラテジーとしてのモニター

Rubin (1987) はメタ認知ストラテジーとは自己管理ストラテジーとも呼ばれるもので、学習者が言語学習を監督し、調節して自己管理していくストラテジーと定義し、メタ認知ストラテジーには学習設計、モニター、評価があるとしている。

Wenden (1991) は、学習設計、モニター、評価を以下のように説明している。

学習設計とは学習者が学習の目標を設定し、目標達成のための方法を決め

ること。学習開始前に行われることもあるし、また、タスク遂行時に行われることもある。モニターとは、学習状況を観察し監督する行為。語彙や文法といった細かい点に集中することもあるし、言語活動全体を大局的につかむこともある。評価とは学習の1つ1つの試みの結果と用いた方法（ストラテジー）について下す判断のこと。

## II. 先行研究

### II-1. 東外大での試み

筆者は、モニター能力を「自分および他人が発する言語表現を、正常な言語使用から逸脱していないかチェックする能力」と定義し、1991年に中級の話し方の授業で、学習者のモニター能力の養成を目指した指導を試みた。中級学習者9名の発表、報告、話し合いを録音して、学習者の自発的なモニター状況を観察し、個別にモニター状況について評価、コメントを継続的に提示していくことによって、学習者のモニター能力の養成を行った。はじめのうちは、学習者の自発的モニターは鈍く、また偏りのあるものであったが、社会言語学的方面での情報提供とモニター状況についての評価を重ねていくうちに、洗練されていった。学習者のモニター能力を観察した結果、以下の3点で示唆が得られた。

- ① 言語の規則やパターンなどの知識が十分にある学習者のほうが、モニター能力は伸びやすいようである。
- ② Krashen の言う「モニター」をしすぎているように思われる学習者はしすぎているというよりも、モニター能力が偏って使われているのであり、他の方面にも働かせるよう指導することによってバランスのとれたモニター能力が育つ可能性がある。
- ③ 学習者の自己認識が伴わなければ、評価を繰り返して行ってもモニター能力養成につながらないようである。

### II-2. 他の試み

モニターの訓練を取り入れた日本語のオーラルコミュニケーションの授業の報告には他に高木(1993)、田中(1993)などがある。

## III. モニター使用に焦点を当てた指導

### III-1. 言語学習におけるモニターの定義

筆者はモニターをより広く「自分自身の学習状況や学習行動を観察し内省

しながら、確認したり修正を行ったりする行為」と定義しなおす。

### Ⅲ-2. 秋学期の報告

#### Ⅲ-2-A. クラス

国際基督教大学の中級の会話クラスでは自己評価を取り入れた授業を試みた。学習者は24名で、筆者は2セクションのうちの1セクション（学習者12名）を主に担当した。会話クラスでは毎回タスクの目的を設定し、その都度必要な文法や表現を導入し、いろいろなスタイルで話す練習を行った。トピックは読解クラスで使用しているテキストに沿っている。

#### Ⅲ-2-B. 目標と方法

週1コマ、一学期間で9コマしかなく、モニター能力の養成には期間が短すぎたが、毎回チェックリストを用いて自己評価していくうちに学習者がモニターを意識的に働かせるようになるというのが、会話クラスの目標であった。初日には、学習成功者が効果的にモニター行動を行っていることを説明し、その後も何度か自己モニターすることの重要性について話した。毎日のクラスではスケジュールに沿って話す練習を行い、最後にチェックリストで自己評価をするということを繰り返した。

#### Ⅲ-2-C. 結果と考察

学期の終わりに行ったアンケート調査の結果は散々たるものであった。会話クラス全般に対しては概ね好意的な評価であったが、自己評価表が役に立ったかどうかという質問に対しては17名中16名が役に立たなかったと答えた。おもしろくないとか面倒だというコメントの他、自分を評価するのは難しいから先生に評価してもらいたいという意見が目立った。モニターを意識的に使用させるといった目的で行った自己評価であったが、失敗であったと言わざるをえない。

#### Ⅲ-2-D. 反省

なぜうまく行かなかったのか、以下のようなことが考えられる。

- ①チェックリストの項目が多すぎた。広範囲にバランスよく注意を払いながら発話するという事は非常に難しいことであって、発話後に、多方面にわたって自己評価を求めることには無理があった。
- ②教師からのフィードバックが無かった。自己評価の意図は説明してあったものの、学習者してみればいつも一方通行で不安を感じていたであろう。

バランスよくモニターすることは大切であると考え、段階的に導いていく必要があるであろう。はじめにモニターする対象（目標）を定め、まずはその一点にだけモニターを働かせ、発話後に評価する、そして目標が達成

された段階で、次の点に注意を向けさせるということを繰り返すほうがいいように思われる。また、過去の学習過程で、評価は先生にしてもらおうものという認識ができあがってしまっているため、これを急激に変えるのは難しいので、自己評価と同時に教師からの評価も与えていくほうがよさそうである。

### Ⅲ-3. 冬学期の報告

#### Ⅲ-3-A. クラス

冬学期の中級会話クラスの学習者は28名で、3セクションあり、筆者はそのうちの1セクション(9名)を担当した。スケジュールは秋学期と同じである。

#### Ⅲ-3-B. 目標と方法

目標は秋学期と同じで、学習者が意識的にモニターを働かせることであるが、冬学期は上記の反省点を考慮して、チェックリストはやめ、その代わりに、目標設定表と個人カードを用いてモニターの使用を促すことにした。初日には、モニター使用についてのオリエンテーションを行ったあと、学習者の話し合いを録音したテープを再生し、学習者に各自学習目標を決めるように指示した。教師は学習者が選んだ目標を個人カードに書き込み、2回目からは、毎回始めにカードを配って目標を確認させてから、スケジュールにある学習事項を練習し、その日のスタイルでスピーチなりディスカッションなりを行った。授業の終わりには、個人カードに自分の発話についてのコメントを書かせ、カードを回収した。回収したカードに一言二言教師が気付いた点を書き込み、また、次の時間の始めに返すということを繰り返した。途中で学習目標を変更したほうがよいと思われた場合には、学習者との話し合いの上で他の目標を選び、個人カードの目標欄を訂正した。

#### Ⅲ-3-C. 結果と考察

冬学期は、役に立ったかどうかではなく、目標設定と個人カードについて自由に意見を書いてもらう形式でアンケートを行った。目標設定については聞き方が曖昧であったため、上達したかどうかという観点からのコメントも多かった(20名中11名)。それらを除外して目標設定に対するコメントだけを拾いあげていくと、「よくなかった」が1名だったのに対して、「目標を建てたからよく考えた」など「よかった」とする意見が多かった(8名)。個人カードのほうは「自分の話し方を考えられるようになった」という意見もあり、この方法で長期的に指導していけば、モニターの使用を促せる可能性があることが示唆された。個人カードが「よかった」と答えた学習者は20名中11名で、「よくなかった」とする8名を大幅に上回っている。

しかし、自己評価のためというよりも、教師からのフィードバックがもらえる、教師とのコミュニケーションが密になるといった観点から役に立ったと感じている学習者もいたようである。

#### Ⅲ-4. まとめと今後の課題

今後の研究の参考になればと思い、失敗例も含めて今までのモニター使用に関する試みを報告、考察した。調査が完結したわけではないので、まとめるところまでいかないが、今のところ以下のようなことが言えるのではないだろうか。

- ①学習者に満足感を与えるために、日本語でのコミュニケーションに必要な情報を常に与えながら、また、十分に話す機会と時間を与えながら、モニターの使用を促していくべきである。
- ②バランスの取れたモニターが理想的であるが、段階的に、一つ一つ到達目標を明示しながら徐々に養成していくほうがいい。
- ③教師との信頼関係は重要で、教師と学習者の共同作業によって初めてモニターの養成が可能になる。
- ④短期間で結果の出るものではないので、長期的に取り組んでいく必要がある。
- ⑤学習者の自己認識が伴わなければ、モニターの養成にはつながらない。

上記の5点のうち、特に⑤について、過去の学習過程でできあがった価値観を変えることは容易ではないということを感じた。

Wenden (1991) は「意識の内面からの変化なしには、本当の自己管理学習はできない」P. 49 と述べている。また、Smith (1981) は、意識を高めること (consciousness-raising) は時間の無駄ではない」と述べ、まず意識改革を行うことの重要性を訴えている。始めにもっと時間をかけてオリエンテーションを行わなければならないのかもしれない。しかし、同時に学習者の知識欲や発話欲をも満たしていかなければならない。学習者全員に満足感を与えながら意識改革を行っていくにはかなりエネルギーと時間が必要なようである。羽鳥・松畑 (1990) P. 51 は「学習者が真の意味で自己評価ができ、その習慣が自己のうちに形成されるまで練習を積むことが必要である。ある程度、長期的かつ多面的に取り組む姿勢が効果を生む」を述べている。今後も、試行錯誤を続けながら、この問題に取り組んでいきたいと思っている。

尚、モニター使用に焦点を当てた2回の会話の授業は、国際基督教大学の江崎裕子氏と協同で行ったものである。

## 参考文献

- 高木裕子 (1993) 「高次元での「自己評価」を巡って」『日本語教育論集』第3号、関西外国語大学留学生別科、39-53
- 田中真理 (1993) 「初級学習者の自己修正の意識と一オーラル練習を通して」『ICU日本語教育研究センター紀要』29-44
- 豊田悦子 (1991) 「モニター能力養成を目指した話し方指導」『日本語学校論集』18号、東京外国語大学附属日本語学校、161-180
- 西村よしみ (1993) 「日本語授業における学習者の認知過程と学習ストラテジー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第8号、153-174
- 畠弘巳 (1988) 「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』、7月号、100-117
- 畠弘巳 (1989) 「学習者の主体性と教師の役割」『日本語学』12月号、82-91
- 羽鳥博愛・松畑照一 (1980) 『学習者中心の英語教育』大修館
- 吉田研作 (1991) 「外国語学習とモニター利用」『日本語教育』73号、33-43
- Fravell, J. H. (1979) "Metacognition and Cognitive Monitoring: a new area of cognitive developmental inquiry", *American Psychologist*, 34, 906-11
- Krashen, S. D. (1982) *Principles and Practice in Second Language Aquisition*, Pergamon Press
- Morrison, D. M. & Low, G. (1983) "Monitoring and the second language learner" in Richards & Schmidt (eds) *Language and Communication*, Longman, 228-248
- Rubin, J. (1987) "Learner Strategies: Theoretical Assumptions, Research History and Typology" in Wenden & Rubin (eds) *Learner strategies in Language Learning*, Prentice Hall, 15-29
- Smith, M. S. (1981) "Consciousness-raising and the second language learner" *Applied Linguistics*, II, 159-169
- Wenden, A. C. (1991) *Learner Strategies for Learner Autonomy*, Prentice Hall
- Wenstein, C. E. & Rogers, B. T. (1985) "Comprehension monitoring: the neglected learning strategies", *Journal of Developmental Education*, 9, 6-9